

文苑

上田繁一の君を吊ふ詞

教授

本 田 弘

あなあはれ、上田の君や。げに空蟬の世の果なさは、かくこそと驚かれぬるぞかし。君がこぞの秋圖らずも疾に罹りてより、わがどちの心平をらず、ひたすらその怠らんとを祈り合へりしに、八重霞覺束なくも春は過ぎ、さてはとまがふ卯の花の月も立ち、時鳥啼くなる昨日今日、遂に十年の苦學をうたかたになして、千歳の憾やるかたなく逝かれつるは、さながらぬば玉の夢の如くになん。つらく思へばたつ田の學びの庭に、諸共に睡びたりし時にもよ、共に拜聖庵の櫻をかざし、白川に澄める月を愛でし時にもよ。親睦會などのむしろに、眞玉なす清き心をもて、露ばかりも腹に置かず、「バチエロル、オブ、イーチゲン」など語らひうるはしみありけるものを。借も都に上りては、鶯溪あるは三橋亭などにて、たのれ行末辨護士となりたらん日には、しかく、なぞ戯れをかしみありけるものを。あはれ今は空を仰いで訴ふるも、地に俯して嘆くもいらへどなき。裂ける錦は綴ればなほ本の彩を見るべきに、碎ける玉は集むればなほ本の光を放つべにき、爲すある身を以ていにし君には、復たいつの世に

か逢ひ見ん、何れの時にか言問はんげに空蟬の人の世は、定めなき習なりといへど、  
 花よりもなほ仇なるものなれや。軒に音づるゝさみだれに、山時鳥のあやなくも、  
 あやめ草のながきぬを泣くのみかは。行末年毎の花の朝も月の夜も、共に見し世を  
 などか忍ばさらんやは。

思ふとちつごはん度にあはれく

あらましかばと繰言やせん

明治三十二年五月二日

新体詩

浦づと

富津の朝

天 花

薄く黒める浦なみの

色むらさきに變るとき

小松が末の露れちて

巖の苔にかをりあり

緩くよせくる朝潮の

さくやく聲に静かなる

夢よりさめし五位鷺の

はぐたきするよいその上

夕べの幕のねちそめて

すゞ風通ふ辨天の